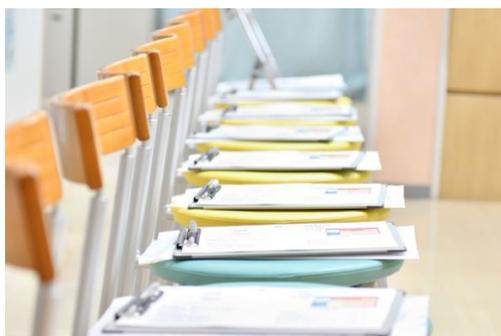


～希少がんを知り・学び・集うセミナー！～

希少がん Meet the Expert

第 11 回 「脳腫瘍」開催レポート

第 11 回「希少がん Meet the Expert」が 11 月 10 日（金）、国立がん研究センター希少がんセンターにて行われました（共催：がん情報サイト「オンコロ」、認定 NPO 法人がんネットワークジャパン）。今回のテーマは「脳腫瘍」。同センター中央病院脳脊髄腫瘍科の成田善孝先生をお迎えし、講演いただきました。司会は希少がんホットライン担当看護師の加藤陽子さんです。



まず、成田先生より、脳腫瘍の解説がありました。

原発性脳腫瘍は、悪性・良性を合わせて 150 種類以上。悪性だけでも様々なタイプがあるため難しい病気です。ほかのがんのように「ステージ」ではなく、「グレード 1～4」で分類されます。1は良性、2～4 は悪性です。

脳から発生する腫瘍のほか、ほかのがんから脳へ転移する『転移性脳腫瘍』があり、がんの患者のうち 10%が転移性脳腫瘍を発症するとのこと。うち 30%は脳転移のコントロールの不良で死亡するとされているため、「主治医、そして脳外科や放射線科の医師と一緒に相談することが大切」とのことでした。

原発性悪性の場合、手術、放射線治療、化学療法を組み合わせた治療を行います。悪性でもっとも多い『神経膠腫(しんけいこうしゅ/グリオーマ)のうち、膠芽腫(しんけいこうがしゅ/グリオブラストーマ)は、腫瘍が発症から 3～6 ヶ月という短期間に増大するため診断がつきにくく、脳ドックでもほぼ見つかりません。難しい病気ではあるものの、現在では手術＋放射線＋テモダール(化学療法)により、治療が可能になっています。また、最近ではアバスチンという薬剤も使用されています。

「多くの脳外科医は『グリオーマは治らない』と思っているが、グレード 2 では少なくとも 20～30%は治癒します」と成田先生。再発に関しては、20 年程度が経過すれば再発しないとのこと。

そのほか、脳腫瘍の症状、手術する病院を決めるうえでのポイント、現在もつ



とも進んでいる手術法である『覚醒下手術』や『術中 MRI』、最近は脳腫瘍も『遺伝子診断』が必須であること、細胞分裂を起こりにくくすることで脳腫瘍の増大をくいとめる『腫瘍電場治療』の解説がありました。

また、病気の受け入れ方など、患者や家族の心の面での具体的な対処法も豊富にお話されました。成田先生の、「必ずいろいろな人が助けてくれる」「患者と家族が、その時にできることを一緒にやることが重要」という言葉が印象的でした。



続いての Q&A では成田先生と加藤さんに、NPO 法人脳腫瘍ネットワーク副理事長の田川尚登さん、オンコロ・コンテンツ・マネージャーの柳澤昭浩さん、同じくオンコロの可知健太さんが加わって行われました。

質問は、「まだがんになっていない人が脳腫瘍で気を付けることは？」「脳腫瘍にかかった人へのアドバイスは？」等。田川さんは、「周りの人に言うことも大事」と言い、協力して病気に向き合っていくことの大切さをお話されました。また、臨床試験について、可知さんより、「現在、特にグリオブラストーマについては臨床試験がほかの希少がんよりも多く行われている」とのことでした。

参加者からは、「症例を挙げていただいて、よりイメージが湧いた」「患者や家族の問題など、ほかのがんにも通じる良い講義が聞けた」との感想がありました。脳腫瘍の知識を得るとともに、気持ちの上での希望も感じられるセミナーとなったのではないのでしょうか。（詳しくは動画をご覧ください）



（開催日：2017年11月10日／写真・文 木口マリ）

【共催】

国立がん研究センター希少がんセンター/がん情報サイト「オンコロ」/認定 NPO 法人がんネットワークジャパン

【後援・運営協力】

株式会社かるてぼすと/樋口宗孝がん研究基金/株式会社臨床・トライアル/株式会社クロエ